

『宇良葉』所収『本式連歌』訳注(一)

伊藤伸江

宗祇の句集『宇良葉』には、集の末尾に三種類の独吟百韻が置かれている。このうち三番目の百韻である『本式連歌』の訳注を試みており、本稿では、翻刻を付すと共に百韻の第一句から第三十句までを注釈する。

『本式連歌』翻刻

本式連歌

何人

- 1 ひかしけふ松のおもはむ老の春
- 2 むめかほる野のわかなつむころ
- 3 山きはの澤水とをく雪消て
- 4 くる、やけふりむかひなるさと
- 5 たかすむを我やとりとはいそくらん
- 6 こ、ろのあるは旅に見まほし

- 7 をはすてやかりねを月になくさめて
- 8 ころもうつ夜のかせなしほりそ
- 9 あまもやはなみのまくらはやすからん
- 10 あしへにかもの霜はらふこゑ
- 11 しつかなるなかれをさむみ日は暮て
- 12 うかへる雲のそらのはかなさ
- 13 ゆきとまるかきりは誰もしらぬ身に
- 14 とをくちきるなとし月のすゑ
- 15 いまこむをきかはをそきもいか、せん
- 16 ゆかりにさへそおもひうかる、
- 17 花ちらす風はよはるもうきものを
- 18 やまはかすみにかねひ、くをと
- 19 はるかなる嶺のともし火かけ深て
- 20 月はたれにかこ、ろすむらん
- 21 秋をあきと知れる計はおほき世に

22 ゆふへをわくはた、おきのこゑ
23 たのめをく露の道しは跡もなし
24 われやはかれん人はうくとも
25 友はみなよからむこそはちきりなれ
とすれはさはくこのうちの鳥
26 雲風に春は心のさそはれて
27 こえぬやまなき花のあらまし
28 みよし野をわかふる里といつかみん
29 みやこもうき身へかたくそなる
30 おさまらむ世をもしらぬは命にて
31 いくさの場もた、あきの露
32 風わたるよもきか月のしろき野に
33 むしの音たかくさ夜ふくる空
34 うらみやはこたへは人のわかさらん
35 おもひしらすはこひもしなはや
36 いたつらになさむもいまはつらからて
37 あさまのけふりむねにのこさし
38 いづくにかみるめもゆかんふしの嶽
39 きえしまもなくつもるはつ雪
40 吹かはりたゆめは風の又さえて

42 冬をかなしむわひ人の庵
43 はるに猶あふとも我身いかならん
44 なれこし花そとしにすくなき
45 みとりそふ木はた、苔を色なれや
46 水ゆくやまのあきふかきころ
47 猿さけふ岩のかりふし月おちて
48 夜はあけわたる霜のかけはし
49 跡とめぬ夢とや雲もわかるらん
50 たつはなにそのおも影そうき
51 あちきなくわすれし人にたえもせて
52 たかわひさするゆふへなるらむ
53 ふる郷にきてはうちなくほと、きす
54 おもへはむかしけにそ恋しき
55 か、れとはいさめさりつる身をすて、
56 こゝろをたにもむなしくやせむ
57 春をへて花はうらみぬあさちふに
58 わかやとからの月なかずみそ
59 袖こゆるなみに一夜をあかしかた
60 友とやきかむ千鳥なくなり
61 山かけの雪のかへるさ舟さして

62 雲さへさひしくれふかき空
 63 秋としもいはれぬや身のうきならん
 64 わか露けさは草木にもみす
 65 風\つらきまくらの野へを今朝分て
 66 夢もやたひの道まとふらん
 67 ゆくはさそおもひやるたにうつつ^三の山
 68 せきはありとも心へたつな
 69 くるしとはなけかさるへき人めかは
 70 ことなくてこそはてまほしけれ
 71 ほとあらしよはひのうち^もいかならん
 72 かたふく月のすゑのむら雲
 73 はつ時雨しくれもあへす秋深て
 74 またうすもみちかつそちり行
 75 野分たつころこそ山もあはれなれ
 76 さりさむけなる川つらのさと
 77 わたしもり誰にまたれていそくらん
 78 身をつくすとも人はおもはし
 79 恋せよとなりこし世かはうらむなよ
 80 こゝろとみちはふみそまよへる
 81 雪^四の夜のゆふつけ鳥よ山こえて

82 あくるもふかし^木たてるかけ
 83 瀧なみに夢はいくたひかへるらん
 84 おもひしつめぬかせのした庵
 85 いとへとも身はたゝちりのうちにして
 86 こゝろならても世をやつとくさん
 87 玉のをのたゆるをまてはあやにくに
 88 きえぬものからあたしのゝ露
 89 はなすゝきなひくはかりに風みえて
 90 月にほのさくはつかりのこゑ
 91 ね覚せぬ人はあはれをいつしらん
 92 うきをわかすはこゝろならめや
 93 とへかしな雨うちかすむ窓のまへ
 94 おもひくらせるやまさとのほる
 95 ^四たゝいまをみよとや花はしほるらん
 96 野へはさかりの秋かせのころ
 97 かり衣こ鷹てにすへ露分て
 98 あさふみちに駒そいはふる
 99 うち出ですゝしくむかふ瀬をひろみ
 100 すめるやいく世きよき山みつ

『本式連歌』 訳注の凡例は以下の通りである。

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の『本式連歌』である。

一、翻刻においては、底本に忠実に翻刻し、句に付された朱点「ヽ」も示したが、便宜を考え百韻全体の通し番号を付した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改めて清濁を付した。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はその旨を注釈に記して改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。

漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。原文は翻刻を適宜参照されたい。

一、【校異】においては、底本の翻刻に対して、左記校校本を略号で示し、校異を記した。表記による違いは採らない。

① 正宗文庫本…：正

② 大阪天満宮文庫長松本（れ5・16・1）…：長

③ 大阪天満宮文庫南曲本（れ甲7）…：南

④ 大分県立歴史博物館急雨亭文庫本…：急

⑤ 静嘉堂文庫本…：静

⑥ 富山市立図書館山田孝雄文庫本…：山

⑦ 都立中央図書館本…：中

⑧ 北海学園大北駕文庫本…：北

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。その際には、連歌本式の規則に従い、懐紙は初折表十句、裏十四句、二折表裏及び三折表裏が各十四句、名残折表十四句、裏六句とし、句の位置を示している。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。表記は基本的に引用文献の表記に従うが、特に必要な場合には、私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に關しては、全体の統一を考えて漢字に直す場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設け

ると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【二句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設ける。

一、【式目】の参考資料として、猪苗代兼載『連歌本式』（書陵部蔵『用心抄』（5107—1—68）合冊『連歌本式』）の十三条を番号と清濁を付して示しておく。脱落している一条は三重県立図書館本にて補い、同本との主たる校異も各条の括弧内に示す。^{注1}

- (1) 面十句毎句発句の賦物に合てすべし
- (2) 賦物昔は発句斗ニ取やうニ有一説ニ脇第三迄と云り（発句斗ニ：「毎句に」）
- (3) 面に名所をもすべし 名所と名所は中五句去べし（書陵部本はこの項脱落）
- (4) 季は五句去べし 此内他の季なくはすべからず
- (5) 月花 松舟 夢 涙 竹 煙 各十句さるべし
- (6) 景物ならべて三句すべからず打越にてもすべからず
- (7) ふり物とふり物打こしを嫌
- (8) そびき物同

(9) 草木同

(10) 郭公 寢覚 景物ニ用之

(11) 槇 檜原 関 猿 山類ニ用之

(12) 季は二句にてもすつべし

(13) 名残裏六句成べし

此外応安新式のごとし

（初折・表・一）

一 引かじ今日松のおもはむ老の春

【校異】おもはむ：おもはぬ（北） おもははん（急）

【式目】春（春） 松（植物） 賦物「老人」（『野坂本賦物集』、

『連歌初学抄』賦物編） 松与松（七句可隔物）

【語釈】○引かじ：松を引くことはすまい。当該句は、「宇良葉」春、七にも「正月九日子日なりし時、独吟に」との詞書を持つて入っているところから、子の日の詠。正月の最初の子の日に、山野に出て、長寿を願いつつ小松を根引く。「ゆくすゑも子の日の松のためしには君がちとせをひかむとぞ思ふ」（拾遺集・賀・290・三条太政大臣）。ただし、ここでは松を引くことをすまいとの言であり、長寿を願うことはすまいとの意の表明となる。○松のおもはむ：松が思うような。北駕文庫本「お

もはぬ」は、誤写であろう。松はるか昔から多くのことを見聞きしてきており、知っている。「我とはば神世の事もたへなん昔を知る住吉の松」(拾遺集・神楽歌・590・惠慶)。老齢になるまでの自分を、松はずっと見てきているのである。自らが生きる姿や長く報われない恋に悩む姿を、松に見られており、その松の抱いた感情を思うと羞恥心が芽生える、と示す歌が参考になる。う。「いかでなほありとしらせじたかさこの松のおもはんこととはづかし」(古今和歌六帖・雑思・名ををしむ・3057)。「忘ればや人めはたゆる宿ながら松のおもはん夕暮れの空」(正徹千首・閑居恋・678)。○老の春：歳をとり、迎えた春。この百韻を詠んだ明応五年には宗祇は七十六歳である。

「花とりになほあくがるるころかなおいの春とも身をばおもはで」(風雅集・雑上・1457・前中納言為相)。「老の春をは誰にかこたむ／涙には霞むも月のとかならず」(菟玖波集・春連歌上・87／88・二品法親王)。「老の春」には、老齢にめぐりきた春を、春ゆえに「花」と合わせる詠が多く見られ、花の視線を意識した、憂寂の感を漂わせている句が見られる。「花もさそ暮はつとみん老の春」(自然齋発句・春・481)。「あらましにのみ捨ぬ世中／花は身長をいかに見るらむ老の春」(相良為統連歌草子・付句・228／229・相良為統)。「人はたのみて見つへかりけ

り／なにとなくうへし花さく老のはる」(新撰菟玖波集・春連歌上・113／114・玄澄法師)。しかし、ここは「松」を合わせ、「老の春」に対する「松」の思いを加えている。「住吉の松のおもはんことのはを我が身にはづるしき島のみち」(玉葉和歌集・雑五・嘉元百首歌たてまつりけるに松・2539・左近中将為藤)のように、自らの和歌の技能が至らないことを、住吉の神の社に生える「松」の思いを意識して恥ずかしく思う和歌も存し、また宗祇は、住吉神社に対する信仰心が強く、この百韻と同じく『宇良葉』末尾に付された独吟百韻『夢想之連歌』の夢想の発句は「住吉の松こそみちのしるべなれ」であった。老齢の自分が、それでもまだ長寿の松にあやかりたく思うのは、おこがましいというだけでなく、松から見れば、自分は齢を十分重ねても、達成すべき歌の道での研鑽・上達をなしていないとの羞恥や謙遜の思いを加えて考えることもできよう。それゆえ、歌道上達を果たせないまま老齢の春を迎えたのを松はどう思うかと自省する思いを述べた訳も括弧内に示したが、補説のように、前年には『新撰菟玖波集』の編纂をなし、正月四日に、その作者部類も献上し終えており、自作に後土御門天皇の勅点を得る計画の只中でもある。素直に、人生の達成を満足感のうちに詠む句作と見ることが充分可能であろう。

【現代語訳】今日は、子の日であるけれど、松に長寿を願うには充分なほど年を重ねたから、もう長寿を願って小松を引くことはすまい。これまで私を見てきた長寿の松が思うことを考え、と恥ずかしいから。(それに、この春は、私にとつては、歌・連歌の道の上達を願いつつもいたずらに歳をとつてしまつて迎えた老の春なのだから。)

【補説】本百韻が詠まれた前年の明応四年には、宗祇は『新撰菟玖波集』の編纂に着手し、兼載との不和がありながらも、六月二日草案本完成の後、九月二十六日に完成本の奏覧に至つた。作者部類に関しても、同年六月から準備されており、『実隆公記』によれば、明応五年正月四日に、『新撰菟玖波集作者部類』を禁裏に提出している。註

四日癸亥未霽、……宗祇法師一荷兩種送之、則来、……又新撰菟玖波作者部類等令進上禁裏了。

さらに、本句の詠まれた正月九日には、宗祇の来訪が記されている。

九日戊子晴、……宗祇法師来、滋野井被勸一盞、雑談、彼法師連哥自句、百句、発句五十句書連之、姉小路宰相清書也、勅点所望之事談之、何様予出仕之時分可申沙汰之由命之。及晚彼法師引合三帖送之、美麗之紙也、秘藏無極者也、

自句に関する勅点所望の依頼を実隆に伝えており、『新撰菟玖波集』とその作者部類の完成をなし、加えて自らの秀句の集成に勅点をもらおうとしており、誇りかであったろう。この百韻の背後には、発句の謙遜を支える宗祇の連歌の道における達成があった。なおこの勅点の話は順調に進み、同年閏二月二十七日に、実隆は宗祇の句の勅点奥書を書いている。別稿を期する。

(初折・表・二)

引かじ今日松のおもはむ老の春

二 梅香る野の若菜摘む頃

【校異】野の…野は(北)

【式目】春(梅・若菜) 若菜(一座一句物) 梅只一紅葉一紅梅一冬梅一青梅一

(一座五句物) 賦物「若人」(『野坂本賦物集』、『連歌初学抄』賦物編)

【語釈】○梅香る野…梅の香のする野辺。宗祇が、同じく脇で「梅香る野」と表現する百韻に、『湯山両吟』があった。「鶯は霧にむせびて山もなし／梅かをるのの霜寒き比」(湯山両吟(文明十四年(一四八二)二月五日賦何路百韻)・発句／脇・宗伊／宗祇)。○若菜摘む…子の日には野に出て若菜をも摘む。

「すゑとほき子日の松に引きそへてわかなも千世の春やつむべき」(続後拾遺集・雑上・春の歌の中に・989・前大納言良教)。

「朝日影のどかにうつる垣根より外面つづきの若菜摘むころ」

(為広集I・着到十三日若菜・93)。「深山路の遠かりつるを野に出て／みれば都の若菜つむころ」(文安月千句第四百韻・331／

332・玄幸／直清)。「ふる沢野辺の若菜つむ頃／霞しく山松が枝に鶴の居て」(姉小路今神明百韻・74／75・心恵／孝)。

【付合】子の日の松を詠む発句に合わせ、同じ日に若菜を摘む情景を付けた。「松」に「若菜」が、「老」には「若」が対されている。また、若菜を摘む時期には、梅も香り始めることを示し情景を広げている。「もとめても花にあはすはいか、せん／

梅をかさせわかなつむ人」(老葉(再編本)・春・13／14)。

【一句立】梅が香る野に若菜を摘む頃。

【現代語訳】(前句 今日、子の日であるけれど、松に長寿を願うには充分なほど年を重ねたから、もう長寿を願って小松を引くことはすまい。これまで私を見てきた長寿の松が思うことを考えると恥ずかしいから。) そんな老齢の私が、梅の香の薫るこの野原で若菜を摘む頃なのだ。

【考察】兼載作の『連歌本式』が、どこまでかつての本式の実態に則しているかはわからない。しかし、金子金治郎氏による

元徳二年(一一三三〇)以前成立の賦小何連歌の分析によれば、表十句は本式連歌の形式に即している。賦物は、同連歌ではおそらく全句に賦していたようである。^{注3} 底本とした櫻井本『宇良葉』の『本式連歌』を見ると、朱で発句から第三まで語の上に点がついており、おそらくそれは賦物の語を示すと思われる。またその他に、第七句の「婁捨」、第二十九句の「み吉野」の語の上に付く点は名所をさし、第四十七句「猿」、第八十二句「真木」の上に付く点は山類であることを示そう。それゆえ、点は本式目の注意すべき項目に連動して付けられていると推察しうるので、この訳注では第三までの賦物を考えておく。

(初折・表・三)

梅香る野の若菜摘む頃

三 山際の沢水遠く雪消えて

【校異】なし

【式目】春(雪消えて) 山(山類・体) 沢水(水辺・用) 雪三用之、此外春雪一似物の雪別段の事也 物「山人」(『連歌初学抄』賦物編) 賦

【語釈】○山際：山に近いところ、稜線のあたり。「きしの柳になひくはつ雪／水こぼる遠の山きはくさかれて」(老葉(再編

本)・533/534)。○沢水：山間の浅い谷を流れる水。「もえそむる草はみながらあさき野に沢水とほくかすむ色かな」(碧玉集・春部・春水 二階堂会当座・231)。○雪消えて：白一色を脱して、春となった景物の様相を示し出す。「入江の沢にうつる日の影／一筋の流は青き雪消て」(享徳二年千句第十百韻・906/907・忍誓/日晟)。「なひきわたれる青柳のかけ／水けふる川辺の外山雪消て」(老葉(再編本)・春・15/16)。

【付合】「雪トアラバ、消：梅」(連珠合璧集)。「沢トアラバ、山野：雪げ」(連珠合璧集)。「見わたせばひらのたかねに雪きえてわかなつむべく野はなりにけり」(続後撰集・春上・麗景殿の女御の歌合の歌・34・平兼盛、和漢朗詠集「早春」にも入る)。眼前の野から遠方の山へと視線を移し、早春の世のありさまを大きく形容する。

【二句立】山際には、沢水の流が遠く見えており、雪は消えていて。

【現代語訳】(前句 梅が薫る野に出て若菜を摘む頃。)山際には、沢水の流が遠く見えており、あたりは雪が消えて。

(初折・表・四)

山際の沢水遠く雪消えて

四 暮るるやけぶりむかひなる里

【校異】けふり：けふる(南・長・急)

【式目】雑 里(居所・体) 煙如此聲物(可隔三句物)

【語釈】○暮るるやけぶり：夕暮れになってきたのか、煙が立ち上っていることだ。夕餉の支度の煙である。「烟たつ麓の里は木隠れて／を舟すてをく江こそ暮ぬれ」(年次不詳何船百韻「散しえぬ」・11/12・行助/心敬)。連歌本式では「煙」は十句去りとなる。この百韻で次に煙が出るのは第38句である。○むかひなる里：向かい側にある里。ここは前句の「山」の向かい側。「むかひなる山はさくらのさきそひて／春ものふかきみよしの、おく」(新撰菟玖波集・雑連歌一・2560/2561・式部卿邦高親王)。

【付合】冬から春へと自然が生命力を見せてくる山の様子に、里の民の日々の暮らしの営みを添える。

【二句立】夕暮れになってきたからか、煙が立ち上っている、山の向かい側の里。

【現代語訳】(前句 山近い沢水の流が遠くに見えて、雪は消えていて。)日が暮れてきたのか、煙が立ち上っている山の向かい側の里。

〔初折・表・五〕

暮るるやけぶりむかひなる里

五 誰が住むを我やどりとは急ぐらん

〔校異〕とは…とか（南・長・急）、とや（中・北・山）、とて

（静）

〔式目〕旅（やどり） 誰（人倫） 我（人倫）

〔語釈〕○我やどり…私の泊まり場所。旅の宿泊地。「いづくにか我が宿りせむ高島の勝野の原にこの日暮れなば」（万葉集・卷三・275・高市連黒人、新勅撰集の羈旅495番により人知らず歌として）「いづくにかわがやどりせむたかしまのかちののほらにこの日くらしつ」が入る。）「いづくにか我がやどりせむ霧ふかきゐなの原に暮れぬこの日は」（瓊玉和歌集・秋下・和歌所にて、原上夕霧といふ事を・249）。

〔付合〕前句の「里」を誰が住むともわからない見知らぬ場所と取り、旅の句に転換する。

〔一句立〕誰が住んでいるところかわからないが、旅人は自分の泊まり場所と思い、そこへと急ぐのだろうか。

〔現代語訳〕（前句 日が暮れてきたからか、向かいの里に煙が立ち上っていることよ。）誰が住んでいるところかわからないが、旅人は自分の泊まれる場所かと思い、そこへと急ぐのだから。

うか。

〔初折・表・六〕

誰が住むを我やどりとは急ぐらん

六、心のあるは旅に見まほし

〔校異〕見まほし…見えまし（急）

〔式目〕旅（旅） 旅只一旅衣など云一

〔語釈〕○心のある…情がある。この付合では、旅人を泊めるような思いやりの心を持つこと。また、美的な情趣を解するとの意味もあり、次句では、そちらの意味となる。「ひとりの月を待友もかな／山里も心のあるは恋しきに」（年次不詳何路百韻「白妙の」・40／41・宗沅／心敬）。「心の有かしはしみか月／露おもきもとあらの小萩風もなし」（園塵第四・秋・4690／

4691）。○旅に見まほし…旅の途中で経験したい。「またしらぬ人の情を旅に見て／雪をわする、夜はのうつみ火」（石山千句第

一百韻・81／82・能哲／你阿上人）。

〔付合〕誰ともわからない里人の、思いやりの心を頼みにする旅人の祈る思いを付けた。

〔一句立〕情け深い気持ちがある人には、旅でとりわけ出会いたいものだ。

【現代語訳】(前句) 誰が住んでいるところかわからないが、旅人は自分が泊れる場所かと思ひ、そこへと急ぐのだろうか。) 情け深い気持ちのある人には、旅でとりわけ出会いたいものだ。

(初折・表・七)

心のあるは旅に見まほし

七 姨捨や仮寝を月に慰めて

(をほすて)

【校異】 かりねを…かりねの (中・山・静) なくさめて…なくさめし (南)

【式目】 秋 (月) 旅 (仮寝) 姨捨 (名所) 月 (光物) 月 :

如此光物 (可隔三句物)

【語釈】 ○姨捨…信濃国の歌枕。現在の長野県千曲市の冠着山一帯をいう。『大和物語』の更科に住む男が老女を捨てて逸話で詠まれた歌「わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」(古今集・雑上・878・詠み人知らず)が有名であり、古来月の名所とされている。宗祇も『浅茅』で信濃国の名所として「姨捨山」を示している。「さらしなやおぼすて山のみかしより秋のこころは月ぞ知るらむ」(続後拾遺集・秋下・題しらず・356・祝部成茂)。「後にそ法の心をはえし／うら

みつるおは捨山の月晴て」(老葉(再編本)・雑下・1311／1312)。

○仮寝：旅先にて宿泊すること。「旅トアラバ、かりねかり枕」(連珠合璧集)。

○月に慰めて…月を見ることで心を慰めて。「たびの空にたぐひなき物はよはの月浪のまくらに草の枕に」(拾玉集・十題百首・雑・2639)。「都もよほす涙とそなる／慰めにかりねを月や尋ぬらん」(年次不詳何人百韻「梅か、の」・50

／51・正純／玄清)

【付合】 旅の三句目であり、秋の語句(月)を入れた。「秋の夜のながきおもひをいかがせん月になくさむこころならずは」

(続後撰集・秋中・題知らず・土御門院小宰相)。次句には完全な句境の転換が要求される。

【一句立】 ここ姨捨では、わびしい仮寝の気持ちを月を見ることで慰めていて。

【現代語訳】(前句) 月の情趣を解する友には、旅で会いたいものだ。ここに姨捨では、わびしい仮寝の気持ちを月を見ることで慰めていて。

【補説】 『連歌新式(天文十七年注)』は、新式の「近代一ノ懐紙引返之第二句迄、恋・迷懐・名所等猶如_レ面不_レ付_レ之。右取_レ要書_レ之。」の項目に關し、次のように記す。^{注4}

一、引返之第二句まで嫌物を定事は、本式連歌は面十句書

故也。然者四之紙之裏に六句書之。作法多之。面之七句目に名所を必する也。此等之例に准て、近代之連歌も十句之内を憚事有。

この注からは、本式では表の七句めに必ず名所を詠む規定があつたと読み取れ、本百韻もその規定を守っている。また、宗祇が明応二年（一四九三）三月九日に兼載、肖柏らと清水寺で張行した本式の百韻も初折七句めに名所がある。兼載が明応元年（一四九二）十二月に清水寺に奉納した『連歌本式』では「面十句」の句数で、「面に名所をもすべし」と規定されているのみであるが、天正十七年注に記された本式の方がより詳しい。^{注5}

また、連歌新式では、「月」は七句去りだが、本式では「月」は十句去りである。この百韻で次の「月」が詠まれるのは、第二十句で、本式の規則に抵触しない形となっている。

（初折・表・八）

（をばすて）
姨捨や仮寝を月に慰めて

八 衣打つ夜の風なしほりそ

【校異】 うつ夜の…擣衣は（急）

【式目】 秋（衣打つ） 夜分（夜） 衣与衣（可隔五句物） 夜与夜（可隔五句物） 風与風（可隔五句物）

【語釈】 ○衣打つ…砧で衣服をたたき、柔らかくする。「衣打トアラバ、月、…更科里」（連珠合璧集）。「さらしなや夜渡る月の里人もなぐさめかねて衣うつなり」（建保名所百首・佐良科里信濃国・541・後鳥羽院）。○風なしほりそ…草木を吹いてたわみしおれさせる風よ、吹かないでくれ。「しほる」（ラ行四段・他動詞）は、風が吹いて、草木をたわませたりしおれさせたりすること。「しをりつるかぜはまがきにしづまりてこはぎがうへに雨そそくなり」（歌合（延慶二年〜三年）・一番右・風後草花・2・中将）。

【付合】 「月」の名所であり、更科の里である「姨捨」の地に、「衣打つ」を付けた。

【二句立】 衣を打つ夜には、草木を吹いてたわみしおれさせる風よ、吹かないでくれ。

【現代語訳】（前句 ここ姨捨では、わびしい仮寝の気持ちを美しい月を見ることで慰めていて。）そんな月の下で衣を打つような秋の夜には、草木を吹いてたわみしおれさせる風よ、吹かないでくれ。

（初折・表・九）

衣打つ夜の風なしほりそ

九 海人もやは波の枕はやすからん

【校異】 なみ…海（中） やすからん…あかさらん（中）

【式目】 雑 海人（水辺・用） 波（水辺・用）

【語釈】 ○波の枕…水辺や水上で夜を明かすこと。「すまのあまの波の枕に鳴く千鳥いく夜の夢の関となりけん」（南朝五百番歌合・二百八十番左勝・冬三・559・藤原経高朝臣）。「朝夕はなみの枕に松のかせ／水のうへにや夏を送らむ」（老葉（再編本）・夏連歌・301／302）。「船とむる波の枕にかよふなり蟹の磯屋をたたく水鶏は」（菊葉集・夏・三善為徳・406）。「月のみそやとるとはみるあま人はぬるよさためぬ浪の枕に」（雅種家集・海辺月・118）。

【付合】 付句を今度は水辺の句に切り替える。秋風が強く吹く夜寒の泊まりを思いやった。

【一句立】 海人であっても、水辺で眠るのはたやすいことではないだろう。

【現代語訳】（前句 衣を打つような秋の夜には風よ、止んでおくれ。）海人であっても、（秋風が寒く吹く）水辺で眠るのはたやすいわけではないだろうから。

（初折・表・十）

海人もやは波の枕はやすからん

十 芦辺に鴨の霜はらふ霜

【校異】 あしへに…あしやに（中）

【式目】 冬（霜） 芦（植物） 鴨（動物・体用之外） 芦（水

辺・用） 霜（降物） 霜…如此降物（可隔三句物）

【語釈】 ○芦辺…芦の生えている水辺。「あしべよりかものはおともさよふけていりえにこほる月をみるかな」（雅有集・水鳥・187）。「鴨トアラバ、あしべ」（連珠合璧集）。○霜はらふ…霜を払う。ここは、冬の夜に、水辺にも霜が降り、目を覚ました鴨が羽に置いた霜を羽ばたきして払い落とす様子。万葉歌「葦辺行く鴨の羽がひに霜降りて寒き夕は大和し思ほゆ」（万葉集・慶雲三年丙午、難波宮に幸せる時に、志貴皇子の作らす歌・64）に早く芦辺の鴨の情景が詠まれ、霜と合わせては、

「霜はらふ鴨の上毛やいかならん十符の菅薦さゆる夜な夜な」

（堀河百首・冬・霜・928・河内）などに、羽毛に置いた霜を払いのける様が詠まれた。

【付合】 前句で詠まれた、水辺での泊まりのつらさから、霜が降りる厳しい寒さとなった夜の芦辺の鴨の様子にうつる。「冬の心、霜…、鴨…」（連珠合璧集）。「鴨 水辺也。冬也。」（産

衣)。付句は、夜半、寒さに目覚めた鴨がみじろぎする際の鳴き声をも入れ「霜はらふ声」と詠んでいる。前句と合わせて、人も鴨も寒さに眠ることができない様子となる。

【一句立】芦辺では、厳しい寒さによって羽毛に降りた霜を、鴨が羽ばたきして払い落としている、その声がする。

【現代語訳】(前句 海人であっても、水辺で眠るのはたやすいわけではないだろう。) 水鳥も同様で、夜の芦辺では、厳しい寒さによって羽毛に降りた霜を、鴨が羽ばたきして払い落としている、その声がする。

(初折・裏・一)

芦辺に鴨の霜はらふ声

十一 静かなる流れを寒み日は暮れて

【校異】なし

【式目】冬(寒み) 流れ(水辺・用) 日(光物) 日:如此光物(可隔三句物)

【語釈】○静かなる…水音がしめやかである様。「関の戸にけふは年もや越くらん／をとしつかなる山中の水」(宝徳四年千句第一百韻・5／6・専順／日晟)。「みねの木こりのくたる里々／しつかなる河辺にかよふ道見えて」(河越千句第七百韻・608

／609・道真／長剥)。「かすむもきよき玉川の水／しつかなる夜の流れに月更て」(三島千句第九百韻・820／821)○静かなる流れを寒み…静かな水の流れが寒々とした様子であつて。「雪のゆふへにしつむ河風／したくゝるなかれをさむみ鴨なきて」

(老葉(吉川本)・冬連歌・599／600)。

【付合】芦辺の鴨の声を詠む前句に対して、夕暮れ時の静かな水音の句を付ける。

【一句立】静かな水の流れは寒々とし、日は暮れていつて。

【現代語訳】(前句 芦辺では、鴨が羽毛に降りた霜を払っている、その声がする。) 静かな水の流れは寒々とし、日は暮れていつて。

(初折・裏・二)

静かなる流れを寒み日は暮れて

十二 浮かべる雲の空のはかなさ

【校異】はかなさ…はるけさ(正)

【式目】雑 雲(聳物) 雲:如此聳物(可隔三句物) 空空だの

めなど云ては此外也(一座四句物) 雲与雲(可隔五句物)

【語釈】○浮かべる雲…浮雲。「我が身をば浮かべる雲になせればぞつく方もなくはかなかりける」(新千載集・哀傷・自觉浮

雲無所着といふことを・大江千里・2168。『新千載集』の2168歌は、大江千里の句題和歌であり、『白氏文集』卷十七「答元八郎中、楊十二博士」より一句（「身覺浮雲無所着」）を詠む。

「浮かべる雲の世をばたのまじ／道ならぬ身はわびぬるもつらからで」（『宇良葉』内夢想之連歌・558／559）。「うかへる雲は人のみちかも／まよふ身をいつくの山とさためまし」（新撰菟玖波集・雑五・3325／3326・式部卿邦高親王）。

【付合】地上から空に視線を移す。

【一句立】雲が浮かんでいる空のはかないことよ。

【現代語訳】（前句）静かな水の流れは寒々として、日は暮れていつて。雲が浮かんでいる空のはかないことよ。

（初折・裏・三）

浮かべる雲の空のはかなさ

十三 ゆきとまるかぎりは誰も知らぬ身に

【校異】身に：世に（山）

【式目】雑 誰（人倫） 身（人倫）

【語釈】○ゆきとまる…進んでいき、そこで止まること。行き着くこと。「世中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞやどとさだむる」（古今集・雑下・題知らず・987・よみ人知ら

ず）。「雲のなみけぶりの浪もはるかにてゆきとまるべき末ぞしらぬ」（嘉元百首・海路・1385・藤原俊定）。「山ほと、きすくくる一声／行とまる雲の千里や暮ぬらん」（顕証院会千句第八百韻・704／705・満綱／宗砌）。○かぎり…最後。限度。はて。

【註】暮て行かきりはしらぬ月日哉（宗砌等日発句・357）。

【付合】白氏文集の「身覺浮雲無所着」から、前句の「浮かべる雲」に、「身」を付けた。

【一句立】行き着く果ては誰もわからない、そんなたよりない人の身であつて。

【現代語訳】（前句）浮かんでいる雲のある空のなんとはかないことよ。行き着く先は誰もわからない、（まるで雲のような）そんな人の身であつて。

（初折・裏・四）

ゆきとまるかぎりは誰も知らぬ身に

十四 遠くちぎるな年月の末

【校異】なし

【式目】恋（ちぎる）

【語釈】○年月…長い年月。「年月契りながらあはざりける人」（風雅集・恋一・権中納言敦忠・973詞書）。「こりすやれと

も又返し文／年月の恨の数やつもるらん」(熊野千句第一百韻・62／63・頼遍／勝元)。「何とし月の身をのこすらん／仕へきて恵ありつ、頼む世に」(永原千句第二百韻・172／173・兼載／宗祇)。

【付合】 はかなくたよりない人の身ゆえ、遠い先のことなど約束しないでくれと付ける。このあたり、心付で句が進行していく。

【二句立】 遠い先の未来のことなど約束しないでくれ。

【現代語訳】 (前句 行き着く果ては誰にもわからない、そんなたよりなくはかない人の身なのに) 遠い先の未来のことなど約束しないでくれ。

(初折・裏・五)

遠くちぎるな年月の末

十五 いまこむをきかば遅きもいかがせん

【校異】 こむを…:こんと(南・中・長) きかは…:きはは(中)

【式目】 恋(来む)

【語釈】 ○いまこむ…:もうすぐ行くよ。女性側から見た、恋人が訪ねてくる際の約束の言葉。「今来むといひしばかりに長月の有明の月をまちいでつるかな」(古今集・恋四・691・素性法

師)。「有増の道はかすみもへたつなよ／いま来んとこそいひしくれなれ」(宝徳四年千句第七百韻・649／650・宗砌／日晟)。

「人は憂くともいか、うらみむ／いまこむのゆふへを花に風もまた」(新撰菟玖波集・恋下・1885／1886・肖柏法師)。○遅き:男性が、女性の家を訪れるのが遅いこと。「来ぬをしらてそまつははかなき／かならすの暮はをそきもうらむなよ」(文明三年二月二十四日何船百韻・12／13・真界／俊賀)。

【付合】 遠い先の約束について詠む前句に、目前の約束についての付合を付ける。とても待てない遠い先の約束などより、今日の夜についての約束を願ひ、すぐに行くよと言ってくれたならそれを頼みに、来るのが遅くとも待つことができるとする。切ない女心の句。

【二句立】 もうすぐ行くよとの言づてを聞いたなら、あの人があるが遅くても、どうだろうか、なんとか待てるのだ。

【現代語訳】 (前句 遠い先の約束をしてくれるな、長い年月のその先なんて(そんなものはとても待つことはできそうもない)。(でも、)もうすぐ行くよという言づてをもし聞いたなら、あなたが来るのが遅くても、どうだろう、なんとか待てるのだ。

(初折・裏・六)

いまこむをきかば遅きもいかがせん

十六 ゆかりにさへぞ思ひうかるる

【校異】なし

【式目】恋(思ひ)

【語釈】○ゆかり：縁、よすがとなるもの。関係があるもの。

こは恋人ゆかりの手元の品々。「うき人の月は何ぞのゆかり
ぞとおもひながらもうちながめつつ」(新古今集・恋四・1266・

後徳大寺左大臣)。○思ひうかるる：気持ち動揺する。「うか

る」は、心がうつろになつてしまうこと。「うかるるこゝろ恋

のならひか／待てといふ人ありかほの夕まくれ」(新撰菟玖波

集・恋上・1469／1470・三品親王)。「しかねもよそにてつくすわれ

のみとおもひうかるる月の夜すがら」(内裏御会永仁元年八月十

五夜・月前鹿・一条冬良・58)。「おもひうかる、空もはつかし

／見ぬ人をた、吹風に聞初て」(老葉(再編本)・恋上・741／

742)。

【付合】恋人があてにできず苦しい現在の心情を付けた。

【二句立】ゆかりのものにさえひどく心が動揺してしまうこと

よ。

【現代語訳】(前句) もうすぐ行くよという言づてを聞いたら、

来るのが遅いのも、どうだろう、何ともないのだが、その知ら
せがない今は)あの人のゆかりのものにさえ、ひどく心が動揺
してしまうことよ。

(初折・裏・七)

ゆかりにさへぞ思ひうかるる

十七 花ちらす風は弱るも憂きものを

【校異】風は：風も(中・山・静) よはるも：よはるは(中・

山・静)

【式目】春(花) 花三懐紙をかふべし、
にせ物の花此外に(一座三句物) 風与風

(可隔五句物)

【語釈】○花散らす風：桜を散らす風。花を散らすので恨めし
い存在である。「花ちらす風のやどりはたれかする我にをしへ
よ行きてうらみむ」(古今集・春下・さくらの花のちり侍りけ

るを見てよみける・76・素性法師)。「はなちらす風のやどりを

しら雲にたづねわびてや鳥もなくらん」(宗祇集・春・春鳥と

いふ事を・52)。「花ちらす風はいつくにとまるらん／おのへに

かすむまつの一もと」(老葉(再編本)・春・9／10)。

【付合】縁のあるものにさえ、心が動揺してしまうものだとい

ういう具体例として、風を花の「ゆかり」とする。なお、本式

では「花」は十句去りで、本句(第十七句)の後には、第二十八句に詠まれている。さらにこの百韻では「花」は五句詠まれている。

【一句立】花を散らす風は、弱くなくても恨めしいものであつて。

【現代語訳】(前句縁あるものにさえも、心が動揺してしまうことよ。)花を散らす風は、弱くなくても、花のために恨めしいものであるが(花に縁のあるものでもあつて)。

【補説】花を散らす風は、その花が散つた後にも、「花のゆかり」として花を懐かしむよすがとされている。「散らすとてうらみし風のけふよりははなのゆかりになつかしきかな」(藤原親盛集・夏・卯月のついたちのひ、風のふくを・25)、「したへは人のうさもおほえず／青葉ふく風さへ花のゆかりにて」(看聞日記紙背何路連歌(ひととせに)・応永三十二年十二月十一日・14／15・無記名／善喜)。この付合で、「ゆかり」に「花散らす風」とつけるのは、花と風を恒常的に結ぶこのような意識による。一方、「うかる」という心情に、「花」を賛美する気持ちをつけてもいる。花を見て心が「うかれ出る」心情は「おほつかかなはなは心の春にのみいづれのとしかうかれそめけん」(山家集・春・149)等に詠まれている。

(初折・裏・八)

花ちらす風は弱るも憂きものを

十八 山は霞に鐘ひびく音

【校異】をと：音く礼(南) 雪露(長)

【式目】春(霞) 山(山類・体) 霞(簞物) 霞：如此簞物(可隔三句物) 山与山(可隔五句物)

【語釈】○山は霞に：山は霞に包まれて。山全体が霞の中にあつて。「さくらさく山はかすみにうづもれてみどりの空にのこるしら雲」(道助法親王家五十首・山花・178・西園寺公経、続拾遺集61にも入集)。「山は霞に暮すしつけさ／あけたては花のうへのみ心にて」(春夢草・付句・41／42)。○鐘ひびく音：鐘が鳴り響く音。「鐘トアラバ、ひゞき」(連珠合璧集)。鐘の音は、「山海経」の豊山の鐘の故事から、冬の霜が降りる寒い夜に鳴り響くとされていて、「八雲御抄」にも「かねのこゑかねはしもにひびく也」とある。当該句は春の霞に鐘が響くところを珍しい。「鐘ひびく音」の連歌の用例も少なく、後世のものとなる。「ほのかにもなを鐘ひ、く音／みし夢の名残の枕そはたて、」(玉屑集・4454／4455・玄仍(4455))。「いつくの寺ぞ鐘ひ、く音／折り来し年のなこりの閑かにて」(橘園集・冬・276／277)。

【付合】 風に霞を付け、風にのってくる鐘の音色を付けた。風が弱まった後の春山の情景を付句で表現している。「霞トアラバ、…風」（連珠合璧集）。

【一句立】 山は霞に包まれ、そこに鐘が響く音がする。

【現代語訳】（前句 花を散らす風は、弱くなっても恨めしいものであるが、風が弱くなって）山は霞に包まれ、そこに鐘が響く音がしている。

【補説】 本句と次句は『老葉』（再編本）1171・1172に入り、『愚句老葉』宗祇注がある。

（初折・裏・九）

山は霞に鐘ひびく音

十九 はるかなる嶺のともし火かけふけて

【校異】 なし

【式目】 雑 嶺（山類・体）

【語釈】 ○嶺のともし火…嶺に見える燈火。ここは前句の「鐘」からも嶺にある寺の燈。『愚句老葉』宗祇自注は、「居所なくとも灯などはする物にやと、不審のかた侍りし、鐘・灯などはさもやと申侍し」と言う。「をはずせや夕の鐘のこゑきえて光かすそふ嶺のともし火」（永享六年詠草（正徹）・古寺燈・474）。

「夢さそふかねはふもとにこゑ落ちて雲に夜ぶかき嶺のともし火」（宗祇集・古寺鐘・238）。○かけふけて…燈の光が夜更けの様子となつて。光が弱く小さくなつてきている様子。「そむけたる壁の灯かけふけて心もしめる春雨の宿」（菊葉集・春上・宰相入道了禪・98）。「残ることは夜は明にけり／双紙よむ窓のともし火かけ更て」（園塵第三・雑上・3684／3685）。

【付合】 前句の山に付句では嶺を付け、山に響いた鐘の音から嶺にともる山寺の燈火へと、意識を集中させ、聴覚から視覚へと句を変化させる。時間も暁近い夜更けへと進む。「山トアラバ、嶺とも谷とも山類のよりきたれるを付べし。又植物には松桜、生類には鳥鹿などよし。」（連珠合璧集）。

【一句立】 はるかなる嶺に見える灯の光も夜更けの様となり。

【現代語訳】（前句 山は霞に包まれ、そこに鐘が響く音がする。）はるかなる嶺に見える灯の光も夜が更けた様子になつていつて。

（初折・裏・十）

はるかなる嶺のともし火かけふけて

二十 月は誰にかん澄むらん

【校異】 なし

【式目】 秋（月） 月（光物） 月：如此光物（可隔三句物）

（初折・裏・十一）

【語釈】 ○心澄む…心が澄み切った境地になる。「あやなくもた

月は誰にか心澄むらん

のむ夜くるし雨の音に心すむべき灯のもと」（春夢草・恋下・

二十一 秋を秋と知れるばかりは多き世に

寄雨恋・1615。「心すむかぎりなりけりいそのかみふるきみやこ

【校異】 秋を…秋は（急） しれる…おもふ（中・山・静） 計

のありあけの月」（玉葉集・秋下・五十首歌中に・前大僧正慈

は…斗は^の（南）、はかりの（長）

鎮・699。「見る人もころすむべきあかつきに待ちてや出でし

【式目】 秋（秋）

有明の月」（宗祇集・晨明月・125）。

【語釈】 ○秋を秋と知れるばかり…秋をただ秋だと知っている

【付合】 次第にか細くなつていく嶺の燈の光から、空の月へと

だけの。表面上知っているだけで、真に秋を感得するような深

視線を移す。語釈「心澄む」の例歌や、「背^レ燭共憐深夜月」

い感情は抱いていない人間を言う。秋の思いを心に深く沈潜さ

（和漢朗詠集・春夜・27・白居易）などのイメージから、時刻

せる境地を持つことが、「秋を秋と知る」ことである。「秋をあ

としては夜更けから明け方が意識される。さらに、一句では月

きとおもひいれてぞながめつるくものはたてのゆふぐれのそ

を擬人化し、心が澄む光景に存する相手として思いやる。

ら」（秋篠月清集・秋・920）、「秋をあきと思ひしりぬる心より

【一句立】 人は月によつて心が澄むものだが、月は、一体誰に

ふかく成行く身のうれへかな」（拾玉集・百番歌合・三十五番

よつて心が澄むのだろうか。

右勝・1775）のような心境と対比される境地。

【現代語訳】（前句 はるかな嶺に見える灯の光も、弱くなり夜

【付合】 「月」に「秋」を付ける。

更けの様子を見せている。）人は、月を眺めることによつて心

【一句立】 秋をただ秋だと知っているだけの人間は多い世の中

が澄んだ境地になつていくのだろうか、一体あの月は、誰に

に。

よつて心が澄むのだろうか。

【現代語訳】（前句 一体あの月は、誰によつて心が澄むものな

のであろうか。）秋をただ秋だと知っているだけの、浅い心根

の人間ばかりは多いこの世の中で。

(初折・裏・十二)

秋を秋と知れるばかりは多き世に

二十二 夕をわくはただ萩の声

【校異】なし

【式目】秋(萩) 萩(植物)

【語釈】○夕をわく：夕暮れ時の光景を分けて渡ってくる。「と
きしもあれゆふべをわきて秋風もさびしかれとやふきまさるら
ん」(延文百首・秋夕・2842・二条為重)。○萩の声：萩がそよぐ

音。「心とめてきかずはあやな吹くかぜのあきのこととはただ

萩のこゑ」(雪玉集・萩・4096)。「風やあらぬ夕はわきて萩のこ

ゑ」(兼如発句帳・萩・428)。萩が秋の夕風にそよぐ音は、心に

深い感情を起こさせる。「おもふにも過ぎて哀に聞ゆるは萩の

はわくる秋の夕風」(西行法師家集・秋・秋の歌どもよみ侍り

しに・243)。「なほざりのおとだにつらきをぎの葉にゆふべをわ

きて秋風ぞふく」(新勅撰集・雑一・兵部卿成実よませ侍りけ

る萩風といふ心を・1068・藤原信実朝臣)。「初風もはや秋ふかし

おきの声」(老葉(再編本)・発句・1677)。

【付合】「萩とあらば、秋風 秋と告げつる」(連珠合璧集。前

句で、秋の深い情趣を理解できない人間ばかりの俗世界を示

し、そこでは情趣を運ぶ「萩の声」はただむなしく聞こえてい

るばかりと付けた。

【一句立】夕暮れ時の光景を分けて聞こえてくるのはただ萩の
そよぐ音ばかりだ。

【現代語訳】(前句 秋をただ秋だと知っているだけの、浅い心
根の人間ばかりは多い世にあつては、)夕暮れの世を分けてく
るのは、秋の情趣も伝えることができない、虚しい萩の声ばか
りだ。

(初折・裏・十三)

夕をわくはただ萩の声

二十三 頼めおく露の道芝跡もなし

【校異】なし

【式目】秋(露) 恋(頼め) 露(降物) 露：如此降物(可隔

三句物)

【語釈】○頼めおく：あてにさせた。「たのむ」はマ行下二段の

他動詞。「たのめおくふる郷人の跡もなしふかきこの葉の霜の

した道」(新後撰集・冬・建保四年、百首歌たてまつりける

時・光明峰寺入道前撰政左大臣・458)。○露の道芝：露が置い

た道の草。道芝は、道端の雑草。「文明十三正十八御月次ふむ跡は露

の道芝色きえて月の雪にもみゆるのべかな」(基綱集・野徑

月・87)。「月影はらふ露のみちしは／里はあれて人こそとはね秋の風」(称名院追善千句第十百韻・14/15)。○跡もなし：痕跡もない。「麓までおなじささ原跡もなしみ山の庵の露の下道」(後京極殿御自歌合建久九年・八十九番左・17)。「真砂地は人のかよへる跡もなし／ちりのみつもる古寺の庭」(行助句集・259/260)。

【付合】萩の声しか聞こえない夕暮れの情景の前句に、道の草には露のみ置いて、人の通った跡もないと付けることで、人氣の無さをより強く示す。さらに、ここは秋の四句めであるから、付句に人恋しさを感じさせる「頼む」や涙を思わせる「露」を使うことで、次句での恋への移りを準備している。「たのめおくことの葉だにもなきものをなにかかれるつゆのいのちぞ」(金葉集二度本・恋上・420・皇后宮女别当)の歌が示す、恋人の言葉もなく、その苦しみに葉に置く露のようなはかない命も、消えてしまいたいそうだとする「ことの葉」と「葉に置く」露のイメージも合わせ、萩の葉の声はあるが、草の葉に露置く道には、肝心の人の姿がないとした。

【二句立】頼みをかけていた、露が置いた道の雑草には、人の通った跡もないのだ。

【現代語訳】(前句 夕暮れの景を分けて聞こえてくるのはただ

萩のそよぐ音ばかりだ(人の声もしない)。頼みをかけていた、露の置く道の雑草あたりには、人が通った跡さえもない。

(初折・裏・十四)

頼めおく露の道芝跡もなし

二十四 我やは離れん人は憂くとも

【校異】われやはかれん：われやわかれん(北) うく：うし

(中)

【式目】恋(憂く) 我(人倫) 人(人倫)

【語釈】○我やは離れん：私から離れていこうか、いやそんなことはない。「ちかひのうみのふかきをもしれ／松山をわれやはこさんおきつなみ」(老葉(吉川本)・恋上・871/872)。○人は憂くとも：たとえあの人がつらい態度であろうとも。「人はうくともいか、うらみむ／いまこむのゆふへを花に風もまで」(新撰菟玖波集・恋下・肖柏法師・1885/1886)。

【付合】前句を、恋人が訪れてくれない自宅までの道の様子として恋に読み、恋の思いを付ける。

【二句立】あの人私に冷たくつらい態度だとしても、私から離れるだろうか、いやそんなことはない。

【現代語訳】(前句 頼みをかけていた、露が置く道の雑草に

は、人が通った跡さえもない。だが、あの人が辛い態度であつても、私から離れていくだろうか、いやそんなことはない。

(二折・表・一)

我やは離れん人は憂くとも

二十五 友は皆よからむこそはちぎりなれ

【校異】なし

【式目】雑 友(人倫)

【語釈】○友は皆…友人はみんな。「ふる雨のその心に友はみなあるもむかしのくらきおも影」(草根集・夜雨・5626・宝徳元年四月十一日条)。「身はいつまでの老のなからへ／友はみななきおほくもなれるよに」(玄旨公御連歌・付句雑部・1384／1385)。「よよからむ…ちようど良い相手、適切、同類であること。」「よし」は適切であること。○ちぎり…前世からの因縁、宿縁。

【付合】二人の間が切れないことを詠む前句の理由を、付句で説明する。一句ではいわゆる「類は友を呼ぶ」との意味を詠んでいる。

【二句立】友人というものは皆、自分にちようどつりあう相手

だということこそ、前世から定まっている因縁なのだ。

【現代語訳】(前句 相手が辛い態度を取ったとしても、私からは離れようか、いや離れない。)友人というものは皆、自分にちようどつりあう相手だということこそ、前世から定まっている因縁なのだ。

(二折・表・二)

友は皆よからむこそはちぎりなれ

二十六 とすればさはぐ籠の内の鳥

【校異】なし

【式目】雑

鳥只一春一水鳥、村鳥等之間一、鳥獸と云て又二、狩場鳥、浮寝鳥、夜鳥等は各別物也

(一座四句物)

【語釈】○とすれば…そうだとすれば。ともすれば。「そゑにとてとすればかかりかくすればあないひしらずあふさきるさに」(古今集・雑牀・1060・よみ人しらず)。○籠籠の内の鳥…かごの中の鳥。自由に外に出られないことを詠まれる。「秋の月見れはこゝろやしらるらん雲井にかへす籠の内の鳥」(草根集・6191・宝徳二年正月二十五日条)。「ななはななれては心留めん家もなし／なれしもしらぬ籠の内の鳥」(初瀬千句第四百韻・321／322・専順／宰相)。「かける空なき籠のうちのとり／花ちりし嵐をうらみ

雲をこひ」（親当句集・春・あるところの連歌に・77/78）。

【付合】前句の内容を具体的に付けた。籠の内の鳥は、語釈の例のように、外に出られず、閉じ込められたままに騒ぐ様が詠まれる。例えば、『孤竹』には、「籠の内の鳥」についての次のような注がある。

96 人音にさめつる後は目もあはず

97 哀れに鳥のさはく籠の内

一句は籠の鳥の事までにて分明也、付心は、籠鳥の人音に目をさましたるまゝ、さはきたてたる儀なり、籠にこふ鳥のあはれを思ふ理迄也。

「籠の内の鳥」は、どの鳥も同じく不自由で外に出られない。宗祇は、こうした鳥に、人の姿を投影して詠み込んでいる。

【一句立】ともすれば、かごの中で騒いでいる鳥。

【現代語訳】（前句 友はみんな自分とちようど同じくらいであることは、前世からの約束としてあることよ。）そうだとすれば、かごの中で騒いでいる鳥たちのようなものなのだ。

（二折・表・三）

とすればさはく籠（三）の内の鳥

二十七 雲風に春は心のさそはれて

【校異】春は：春の（中） 心の：心を（正）

【式目】春（春） 雲：如此聳物（可隔三句物） 風与風（可隔五句物） 雲与雲（可隔五句物）

【語釈】○雲風に：空の雲の姿や、風の感じに。雲や風に誘われ、浮かれいづる、世を厭い逃れるという文脈で使われることが多くある。「時雨行しはしか秋の雲風に身ある物のなきになしつ」（草根集・秋述懐・9531・康正二年九月廿日条）。「雲風にさわぐ遠ちのむらどりも爰にきはひて夕立のこゑ」（雪玉集・遠村夕立・2982）。「はかなき事をおもふゆふくれ／雲風にいひやるはかり待わひて」（新撰菟玖波集・恋上・1505/1506・権大僧都日與）。

【付合】籠の内の鳥が騒ぐ心中を、春の陽気に心誘われたからと付けた。「はなち鳥トアラバ、籠」（連珠合璧集）。「鳥は猶籠の中にこそこもれるに／花の後にや雲をこふらむ」（菟玖波集・春下・文和四年五月、関白家千句連歌に・339/340・救済法師）。

【一句立】雲や風の様子に、春は特に心が誘われてしまつて。

【現代語訳】（前句 ともすれば騒ぐ籠の中の鳥だ。）雲や風の様子に、春は特に心が誘われてしまつて。

(二折・表・四)

雲風に春は心のさそはれて

二十八 越えぬ山なき花のあらまし

【校異】なし

【式目】春(花) 山(山類・体)

【語釈】○花：本百韻では、花が五句ある(17・28・44・57・95句)。連歌本式では、花は十句去りであるが、第17句とこの第28句は、「花」の再登場までに十句隔てており、連歌本式を

順守している。○越えぬ山なき：越えない山はないほど。「お

もかけに花のすがたを先だてていくへこえきぬ峰の白雲」(長

秋詠藻・崇徳院近衛殿に御幸ありし日、遠尋山花といふ心をよ
ませたまひし時よめる・207、新勅撰集57にも入る)と、俊成が
詠んだように、さらに遠くのまだ見ぬ花を求めて山を越えるの
は、山の花見における風雅な行為であった。「かすみこめたる

木、のむら立／見ぬ花のにほひにむかふ山こえて」(新撰菟玖

波集・春上・143／144・智蘊法師)。○あらまし：大体の様子。

「たかさかふらんひ、く晩鐘／尋みし花のあらまし春つきて」

(宗砌句・1203／1204)。「身やことし都をよその春かすみ／またき

野山の花のあらまし」(壁草・雑上・1561／1562)。

【付合】心誘われて赴くのは、花咲く山々であるとし、花を求

めて山に分け入る体とした。「はるくればはなのこず糸にさそ
はれていたらぬさとのなかりつるかな」(詞花集・春・処処花
をたづぬといふことをよませたまひける・白河院御製)。

【一句立】越えない山はないほどの美しい山の桜の様子である
ことよ。

【現代語訳】(前句 雲や風の様子に、春は特に心が誘われてし
まって。)越えない山はないほどの美しい山の桜の様子である
ことよ。

(二折・表・五)

越えぬ山なき花のあらまし

二十九 み吉野をわがふる里といつか見ん

【校異】いつかみん：いつ住ん(南・中・山・正・静)、いつす

まん(北・急・長)

【式目】旅 み吉野(名所)

【語釈】○み吉野：大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡一帯。

奈良時代には離宮があった。「み吉野は花にうつるふ山
なれば春さへみゆきふるさとの空」(最勝四天王院障子和歌・
吉野山大和・16・藤原定家)。○ふる里：古くからの馴染みで
ある土地。「旅の心、：都 故郷 ……山こえて…」(連珠合璧

集。「はなみにぞあくがれいりしよしの山わがふるさとやいろかはるらん」(露色随詠集・626)。「わかふるさと、鳥そさへつる／たかうへしこすゑの野へにかすむらん」(新撰菟玖波集・雑一・2448／2449・権大僧都心敬)。「よしの山わか古郷はとをく来て／たれをたのむのかりは鳴らん」(行助句・1057／1058)。

【付合】花に吉野をつけ、吉野の地の慕わしさを述べる。

【一句立】み吉野を自分の馴染んだ故郷としていつか見よう。

【現代語訳】(前句 (近くで見ようと) 越えない山はないほどの、桜の花の様子だ。)このみ吉野を、自分の馴染んだ故郷といつか見よう。

(二折・表・六)

み吉野をわがふる里といつか見ん

三十 都もうき身へがたくぞなる

【校異】みやこも…都を(急) へかたく…袖かく(南)、袖ホノマから(長)

【式目】旅

【語釈】○へがたき…暮らしにくい。過こしにくい。「へがたきはうき世とこそは思ひしかさてもことしはいくとせの春」(拾玉集・建久二年、伊ろはの和歌を左將軍よみて、よめとありし

かば・春・4579)。「へかたくおもふ恋の世はうし／あふまての玉のをにせん糸もかな」(行助句集・1805／1806)。

【付合】吉野の地に隱遁して過こす思いの理由を、都でのつらい思いとして付けた。「みよしのの山のあなたにやどもがな世のうき時のかくれがにせむ」(古今集・雑下・950・よみ人しらず)。

【一句立】都も、つらいことが多い我が身には、過こし難くなっているのだ。

【現代語訳】(前句 み吉野を自分の故郷としていつか見よう。)都も、つらいことが多い我が身には、過こし難くなっているのだ。

【引用文献典拠一覽】

和歌の引用は、断らない限り日本文学WEB図書館内『新編国歌大観』による。草根集は同図書館内『新編私家集大成』による。万葉集の歌番号は西本願寺本の番号(旧国歌大観番号)による。連歌作品についても、『連歌大観』所収のものは『連歌大観』により、それ以外から掲載の場合、左記に記す。「春夢草」(歌集)は『新編国歌大観』による。『実隆公記』の引用は、『実隆公記』(昭和36・続群書類従完成会)による。

野坂本賦物集…中世文芸叢書4『鎌倉末期連歌学書』(昭和

40・広島中世文芸研究会

連歌初学抄〔賦物編〕：『京都大学蔵貴重連歌資料集』第一卷
〔平成13・臨川書店〕

筑波問答：『連歌貴重文献集成第一集』（昭和53・勉誠社）所
収内閣文庫本

晴月集：『新編私家集大成』第五卷増補宋雅Ⅱ晴月集による。

自然齋発句：『連歌大観』第一卷により、必要に応じ岩波文庫
『宗祇発句集』を参照する。

湯山両吟：新潮日本古典集成『連歌集』（昭和54・新潮社）

姉小路今神明百韻：日本古典文学全集『連歌俳諧集』（昭和
49・小学館）

年次不詳何船百韻「散しえぬ」：『心敬作品集』（昭和47・角
川書店）所収野坂本

年次不詳何路百韻「白妙の」：『心敬作品集』（昭和47・角川
書店）所収大阪天満宮（れ・甲10）本

年次不詳何人百韻「梅か、の」：大阪天満宮（れ・甲10）本
老葉（吉川本）：『宗祇句集』（昭和52・角川書店）

産衣：『連歌法式綱要』（昭和11・岩波書店）
行助句・行助句集：『七賢時代連歌句集』（昭和50・角川書店）

文明三年二月二十四日何船百韻「とふ人に」：『宗祇の研究』

〔昭和42・風間書房〕所収早大図書館本

八雲御抄：『八雲御抄の研究 枝葉部／言語部』（平成4・和
泉書院）による。

春夢草（句集）：書陵部本『春夢草（発句・付句集・無注）』
〔書陵部154・475〕の国書データベース画像による。

永享六年詠草（正徹）：『私家集大成』正徹Ⅴによる。

看聞日記紙背連歌類：『図書寮叢刊 看聞日記紙背文書・別
記』（昭和40・養徳社）

愚句老葉：『連歌古注釈集』（昭和54・角川書店）
称名院追善千句：『連歌古注釈の研究』（昭和49・角川書店）

所収広大本

注

〔1〕三重県立図書館本の引用は、富田志津子「清水連歌
のこと」（『大阪俳文学研究会会報』21号（一九八七・九）
による。

〔2〕金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』（昭和四十四・風
間書房）第四章三「成立の経過」等に言及がある。

〔3〕金子金治郎『菟玖波集の研究』（昭和四十・風間書

房) 第一編第一章三「賦物の制とその推移」。その他、島津忠夫『島津忠夫著作集三 連歌』(二〇〇三・和泉書院) 第三章二「建治新式とその周辺」、木藤才蔵『連歌新式の研究』(平成十一・三弥井書店) にも研究がある。また本百韻に関して、両角倉一『宗祇連歌の研究』(昭和六十・勉誠社) 第一章第二節に百韻の表現分析がなされ、金子金治郎「宗祇の謎―『宇良葉』三百韻を読む―」(一九九六・九・『国語と国文学』七十三巻九号) が賦物や作意を推論する。

(4) 引用は、木藤才蔵『連歌新式の研究』(平成十一・三弥井書店) 付載翻刻による。

(5) 注4書第五章一「天文十七年注」に言及がある。